

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第599号 平成25年8月23日

ローマへの道

8月18日の日曜日、北斗市で「ローマへの道」というイベントが行われ、私は家族共々それを見る為に北斗市まで出掛けて来ました。

この「ローマへの道」というイベントは、地元の北斗市立谷川小学校の金管バンドや函館大学付属有斗高校マーチングバンド等の音楽隊が渡島当別駅からトラピスト大修道院の前の直線道路（通称「ローマへの道」）を通り、トラピスト大修道院で折り返して石別中学校迄パレードするというものです。

当日は、残念な事に雨が激しく、パレードは規模を縮小して行われましたが、市長初め市の関係者や地域のボランティアの皆さん方多数準備に当たっておられ、このイベントが2回目でありながら、地域の中で大きな期待を持って取り組まれている事が良く伝わって来ました。

さて、何故私が「ローマへの道」を見る為にわざわざ北斗市まで出掛けたかといいますと、このイベントは北斗市立石別中学校の教頭で北海道師範塾の副塾頭である小山内先生なくしては存在し得なかったからであり、小山内先生から、昨年、第1回のパレードが北斗市始まって以来の人出があり大成功だったと聞きましたので、ならば来年は見に行きましょうと小山内先生と約束していたものです。



さて、「ローマへの道」というイベントの誕生秘話を少しお話ししましょう。

それは、昨年4月に小山内先生が日高から石別中学校に異動になった事から始まります。

石別中学校に行ってみると良く分かりますが、この中学校はトラピスト大修道院の膝前にあり、校門前の道路からはトラピスト大修道院の正面の門へと一直線で繋がっています。その約700メートルに及ぶ杉並木の景観は、ここが日本の国内とは思えない程です。

このトラピスト大修道院は、カトリックの修道会の一つである厳律シトー会（トラピスト会）の修道院で、「灯台の聖母トラピスト大修道院」とも呼ばれています。

渡島当別の地にフランスから数名の修道者が来て生活を始めたのは、今から120年前の明治29年（1894年）10月の事です。

修道院の創立者であるジュラル・プーリエ師はパイオニアに相應しい強靱な精神力の持ち主だったようで、彼は修道士たちと共に石ころが多く熊笹が生い茂っている荒涼たる原野を開拓し、道を作り、丘を平らにし、谷をうずめて畑に変えたといわれています（トラピスト修道院発行の冊子から）。

以来今日まで、修道士たちは、世俗から離れ、我が身の全てを神に捧げ、祈りと労働の日々を重ねています。

この様にトラピスト大修道院は修道の場ですから、その門は固く閉じられていて誰でも自由に出入りする事は出来ません。

また地域の人々も、トラピスト大修道院の威容と静寂には近づき難いものを感じていたと思います。私の様な俗人は、トラピスト大修道院は、地域の歴史、文化にとって貴重な財産であり、街づくりにももう少し活用しても良いのではと考えてしまうのですが、地元ではトラピスト大修道院に対して「啓して遠ざける」という所があったのではなんでしょうか。

こうした中で、開かずの扉を叩いた人がいます。それが小山内先生で「門を叩け、そうすれば与えられる（マタイ福音書）」という言葉をもとに実行し、今では、トラピスト大修道院の吉元大院長と肝胆相照らす仲となっています。

「ローマへの道」を音楽隊がパレードしたらトラピスト大修道院の存在が広く知られる事になるし、それは北斗市の街づくりや活性化にも良い効果を与える筈だと考え、市役所や市民を巻き込んでそれを実現させた小山内先生のパワーは敬服に値します。

また、「ローマへの道」のイベントにはトラピスト大修道院の協力が不可欠でしたから、修道院との信頼関係を構築した小山内先生の功績は誠に大きいといわなければなりません。

そして、何よりも彼の大きな功績は、トラピスト大修道院に通じる道を「ローマへの道」と名付けた事といえるでしょう。「全ての道はローマに通ず」という言葉がありますが、トラピスト大修道院に通じる道だからこそその道の名には説得力があります。いわれて見るとなる程だと思いますが、でも、今まで誰もその様に発想する人がいなかった事も事実です。

巷間「開かれた学校づくり」という言葉を聞きますが、この「開かれた」という言葉には2つの意味があると思います。

1つは、学校の門戸を地域に向けて開いて行こうというものです。各学校において教育実践を保護者や地域の方々に理解していただく為に積極的に情報を開示すると共に、地域の皆さんの意見を学校運営に反映させて行く。また、地域の教育力を

学校教育の中に積極的に活かして行く、そうした姿勢が各学校には求められています。

もう1つは、学校の持っている力を地域の為に活かすという発想も必要だという事です。学校は地域と切り離されて存在している訳ではありませんから、例えば街づくりといったテーマに関しても、可能な限り学校として参加していく姿勢を持つべきだと思います。

今回の「ローマへの道」のイベントについていえば、学校の中で鼓笛隊やブラスバンド等の活動を行っているなら、そうしたイベントに積極的に参加して盛り上げて行こうという考えがあって良いと思いますし、子ども達にとっても生きた学習の場となる筈です。

少なくとも、街づくりは行政の仕事で学校は関係ないという様な固定的な縦割り意識はなくすべきです。教育は学校の中でという発想を飛び越えて、あらゆる機会を利用して子ども達に学びの機会を提供するという積極的な姿勢を、学校には求めたいと思います。

トラピスト大修道院という地域の宝を学校教育の中に旨く活かそうと考え、また、トラピスト大修道院や市役所とも連携しながら街づくりにも係わって行こうとする石別中学校の取り組みには、学ぶべき点が多いと思います。(塾頭：吉田 洋一)